黒いいたずら

イーヴリン・ウォー
吉田健一訳

新しい世界の文学

白水社

黒いいたずら

新しい世界の文学　17
黒いいたずら
定価　四〇〇円
一九六四年九月一〇日印刷
一九六四年九月二〇日発行
訳者　©　吉田健一
発行者　草野貞之
印刷者　山田一雄
発行所　株式会社　白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一—五
振替東京　三三一二二八
本製　大光堂製本・印刷　精興社印刷

訳者略歴
一九一二年生
一九三一年ケンブリッジ大学英文学科中退
著書
「吉田健一著作集」
訳書
ウォー「ブライズヘッドふたたび」ほか

悪いいたずら

ーヴリン・ウォー
田健一訳

新しい世界の文学

河水社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

黒いいたずら

イーヴリン・ウォー
吉田健一訳

白水社

新しい世界の文学

メリー、およびドロシー・リガンに

第一章

《われら、アザニア国皇帝、サクュ族各首長の首長、ワンダ族の君主、海洋の支配者、オックスフォード大学文学士たるセスは齢二十四歳に達したこの年、全能の神の英知とわが国民の一致した要望によってわれらの祖先の位に即き、ここに……》とそこまできてセスは口述するのを止め、早朝の風を帆に受けて最後に残った船の一艘が沖に向けて去って行く港を見渡して、「野郎ども」と言った。「畜生めら。皆、逃げて行っちまった。」

インド人の秘書は用箋の上に万年筆をかざし、縁なしの鼻眼鏡を掛けた目をまたたきながら、セスが次に言うことを待っていた。

「山地からは何の知らせもないのか。」

「確かなのはございません。」

「ラジオを直しておくようにと言ったのに。マルクスはどうしたんだ。あれに直すように言ったんだ。」

「マルクスは昨晩ここから疎開いたしました。」

「疎開した。」

「はい、陛下のモーター・ボートで。ほかにも大勢おりました。ここの駅長に、警視総監、アルメニ

ア教会の大僧正、『アザニア新聞』の主幹、それからアメリカの副領事というわけで、このマトディの町で名士のかたたちの全部でございました。」

「よくお前もいっしょに行かなかったんだね、アリ。」

「乗る場所がございませんでしたもので。あんなに大勢の名士のかたがたが乗っておいでになってはモーター・ボートがひっくり返りはしないかと思ったのでございます。」

「お前の忠誠に対してはいずれ褒美をやる。それで、どこまでいったんだっけ。」

「逃げて行きましたものについてのお言葉は書かないのでございますね。」

「そう、それは抜かす。」

「はい、消しておきます。それならば、《位に即き、ここに》というところまでございます。」

《ここに、われらの臣民のうちで最近、教唆されてその忠誠に背いたものもこの日付より八日間のうちに臣民としてのその本分に戻ったものはすべて恩赦することを布告する。また……》

*

この二人はマトディの町に昔からあった要塞の二階にいた。その三百年前にここでポルトガル人の守備隊がオマニ族のアラビア人に包囲されて八か月間、籠城を続け、この二階の部屋から沖を眺めて救援の艦隊の帆が現われるのを今か今かと待っていて、それが到着したのは落城して十日後のことだった。

要塞の正面の入り口には、そこに彫刻してあった紋章を削り取った跡がまだ残っていて、それは新たに入城したアラビア人の征服者たちにとっては、そのままにしておけない邪教の産物だったのであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る。

それから二世紀間、アラビア人はその沿岸を支配していた。その後方の山地には土着の、黒くて裸で人食い人種のサクユ族が、痩せてひょろひょろしていて複雑な烙印が押してある牛の群れを飼って、それまでと同じ生活を続けていた。そのもっと向こうはワンダ族の領分で、これはアラビア人がやって来るずっと前にアフリカ本土から渡って来てこの島の北部にいつき、共同で粗末な畑を耕して暮らしているガラ族の移民だった。アラビア人はこの二つの種族と全然、交渉がなくて、山地の方から戦闘用の太鼓の音が聞こえて来ることがよくあり、どうかすると、その辺一帯が村が燃える炎で蔽われるのだったが、それはただそれだけのことだった。この島の海岸に賑やかな町が一つできて、入り組んだ模様の格子作りの窓や真鍮の鋲を打ち込んだ扉があって中庭にはマンゴーの木が茂っているアラビア人の商人の大きな屋敷が並び、二頭の騾馬が騾馬追い同士の喧嘩にならずにすれ違うことができないほど狭い道には丁子とパイナップルの匂いが立ちこめ、市場では両替屋が秤を前に置いて坐り、世界の各地で貿易に用いられているオーストリアの帝国時代のターレル銀貨や、インドのマラッタ族の粗末な金貨や、スペインやポルトガルのギネア金貨を計っていた。マトディから船がアフリカ本土のタンガや、ダール・エス・サラムや、マリンディやキスマユに向かって行き、そこでアフリカの大きな湖がある地方から象牙や奴隷を持って来る隊商を迎えた。マトディではみごとな服装をしたアラビアの豪商たちが手をつないで埠頭を散歩し、あるいはコーヒー店で世間話をしていた。春になって季節風が北東から吹くようになると、ペルシア湾から船隊が島の人間よりも色が白くて、彼らにはほとんどわからない純粋なアラビア語を話す人たちを運んで来た。というのは、年月がたつうち

に島の人間が話す言葉にはアフリカ本土のバンツー族の言葉や、島の奥地にいるサクユ族やガラ族の言葉が相当に混じることになったので、彼らのセム派の血にも奴隷市場で買って来られた女がもっと暗くて豊かな血筋を持ち込み、アラビアの砂漠に生じた彼らの質朴な生活の伝統にアフリカの沼地や森林地帯で培われた本能が合流した。

アラビアから来るそういう船隊の一つがセスの祖父のアムラスを乗せて来て、これは同じ船隊で来た他の人たちと違い、奴隷の子で頑丈なからだの、鰐足（わにあし）で四分の三は黒人の血統の男だった。彼はアラビアのバスラでそこのネストリウス教派の僧侶から一応の教育を受け、マトディに着くと、自分が乗って来た船を売って、そこのアラビア人の国王に召し抱えられた。

それはこの島の歴史では多難な時代だった。ほうぼうに白人が再び現われつつあって、彼らはボンベイからアデンに手を伸ばし、ザンジバルにも、スーダン地方にもいた。彼らは喜望峰を回り、またスエズ運河を下ってその領土を広げていて、彼らの軍艦は紅海とインド洋を遊戈（ゆうよく）して奴隷貿易を取り締まり、アフリカの奥地から奴隷を持って来る隊商も容易に海岸まで出られなくなっていた。マトディでは商いらしい商いがほとんど行なわれず、商人のそれまでの余裕がある生活に何か落ち着かないものが感じられるようになり、彼らは不機嫌そうにカタ樹の根を噛みながら一日じゅう町にいた。もうそこの湾に沿って建っている別荘を維持することができなくて、別荘の庭は荒れ、屋根も落ちて、町から遠い地所にはサクユ族の草を編んだ小屋が現われ始めた。ワンダ族やサクユ族の土人が何人か連れ立って町の中にもはいって来て、市場のあたりをわがもの顔にうろつき回り、アラビア人の一団が別荘から帰って来る途中、町の城壁から一マイルと離れていない所で土人に襲撃されて、一人残ら

ず殺されるという事件さえあった。その頃、山地の土人たちが大挙して町に押し寄せる計画を立てているという噂が伝わり、ヨーロッパ各国は島を保護領にする機会を狙っていた。

この動揺の一時期にアムラスがいきなり現われて、初めは国王の軍隊の総司令官だったのから次には自分の軍隊の大将、そして最後にアムラス大帝と名のる身分になった。彼はワンダ族に武器を与えて、その先頭に立ってサクュ族と戦って連勝し、その家畜を掠め、村を焼き、島の奥地の谷まで敵を追い詰めて容赦なく殺した。それから彼は彼の勝ち誇った軍隊を、それまで彼を支持していた海岸のアラビア人に向けて、三年のうち島を統一して自分がその支配者になった。彼は島の名前も変えて、それまでは地図にサクュ島と書いてあったのをアザニア帝国と改称し、海岸から二百マイルも離れていてワンダ族とサクュ族の領分の境目にあるデブラ・ドワに新たに首府を作った。それは彼が半焼けの小さな村に彼の最後の陣地を布いた跡で、海岸へは、その辺の地理をよく知っているものでなければ辿って行けない、ほとんど道とは言えないものが通っているだけだった。彼はそこを彼の新たな住居に定めた。

やがてマトディからデブラ・ドワまで鉄道が敷設された。その工事はヨーロッパの三つの会社が請け負ってつぎつぎに失敗し、沿線には黒水熱で倒れた二人のフランスの技師と、そのほかにも相当な数に上るインド人の苦力の墓が作られた。その工事中、サクュ族がやって来ては槍の穂を作るために鋼鉄の枕木を掘り起こして持って行き、電信の銅線を切り取って、これは女たちの装身具に用いられた。また、夜になると獅子が工夫の宿舎にはいって来てそこに寝ているものを攫って行って、さらに蚊や、毒蛇や、ツェツェ蠅や、スピリルム扁虱が工事をしているものを苦しめた。また、川筋の跡が

深くなっているのに橋を掛けなければならなくて、これに沿って一年のうちに数日間だけ山地からの水が奔流し、木や、岩や、時には人間の死骸を一まとめに押し流して行った。それに、軽石で埋まっている溶岩台地が五マイルも続いている所があり、暑い季節には鉄の用材が焼けて工夫たちの手に火膨れができて、雨の季節になると地滑りや洪水が何か月もかかってやった仕事を一のみにしてしまった。しかしこういう野蛮な自然は頑強に抵抗しながらも、一歩ずつ後退して行き、進歩の芽が根を降ろして、何年もかかっておよそゆっくりした成長を遂げた後、ついに狭軌で単線のアザニア帝国鉄道に開花した。アムラスはその治世の十六年目にマトディからデブラ・ドワに行く最初の列車に乗った。そしてフランス、英国、イタリア、およびアメリカの各代表と彼の娘、それから彼の跡継ぎになっている婿が彼と同車し、その後ろにつないだ家畜用の貨車には彼の庶出の子供たちが十何人か乗っていた。また別な客車にはアザニアに信者がいる各教会の坊さんたち、もう一台には沿岸地のアラビア人の族長たちとワンダ族の首長、それからサクユ族を代表して一人のめっかちの、いつどうなるかわからないと思っている様子でおどおどしている皺だらけの、年取った黒人がいた。この列車は旗と羽と花で飾り立てられて、海岸から首府に着くまで汽笛を鳴らし続けに鳴らして行った。その沿線は不正規の軍隊で固められ、ベルリンから来たユダヤ人の虚無主義者が爆弾を投げてこれが不発で終わり、機関車から飛んだ火花がほうぼうで野火を起こし、デブラ・ドワに列車が着くと、アムラスは文明国の人たちの祝辞を受けて、鉄道の工事を請け負ったフランス人にアザニア帝国の侯爵の位を授けた。

この鉄道は初めのうちは、汽車の速力とか、力とかいうものをまだ理解しないこの国の住民が頻繁に不慮の最期を遂げる原因になったが、やがて住民のほうがもっと気をつけるようになるとともに、

列車が走る回数も減って来た。アムラスは急行列車、普通列車、貨物列車、汽船連絡列車などがあるりっぱな時間表や、往復切符とか、周遊券とかを売る計画を考案し、島じゅうに網の目をかぶせて伸びた予定線を示す地図まで印刷させていた。しかし鉄道の開通は彼の最後の仕事になって、それから間もなくして彼は昏睡状態に陥り、そのまま世を去った。彼は不老不死であると一般に信じられていたので、重臣たちはそれから三年たってようやくもうそれ以上黙っていられなくなり、彼の死を発表した。その後、アザニア帝国鉄道はその創立者が示した方向に発展しなくて、セスがオックスフォードを卒業して戻って来た時には週に一回、首府行きの列車があり、これは貨物列車の後ろに一台だけ、中に張ってあるフラシ天がすっかりすり切れているみすぼらしい展望車を連結したもので、海岸から首府まで行くのに二日かかり、最初の日はルモで止まって夜が明けるのを待ち、乗客のためには、この鉄道の総裁にとって有利な条件の契約を提案した一人のギリシア人がそこでホテルを経営していた。この停車は当局の説明によれば、機関車の前燈がよく故障するのと、サクユ族が線路を荒らすのをやめないためということになっていた。

アムラスはこの鉄道ほどは人目をひかなかったが、それでも見のがせない他の幾つかの改革も断行した。彼が奴隷制度の廃止を宣言したことはヨーロッパの各新聞で非常な好評を博し、その法律の条文は英語、フランス語、およびイタリア語で首府のどこでも外国人の目につきそうな所に貼り出されたが、地方ではそれについて何の沙汰もなければ、その条文がどれか一つの種族の言語に翻訳されることもなくて、すべてそれまでどおりだった。しかしこうしてヨーロッパ各国による内政干渉を封じることができた。アムラスがかつてネストリウス教派の僧侶に教育を受けたことがあったのは、彼が

白人と交渉する上で非常な強味だった。彼はキリスト教をアザニア帝国の国教にして、それと同時に回教その他の異教を信奉するものには完全な信仰の自由を許した。そして宣教師がやって来ることを奨励したので、間もなく首府のデブラ・ドワには聖公会、カトリック教会、およびネストリウス教派の三人の僧正がそれぞれ三つの大寺院を管理するようになった。またその他にもクエーカー教、モラヴィア兄弟派、バプテスト教派、モルモン教、およびルーテル教派の支部が作られて、外国からの寄付によって維持され、こういうことは多額の金を帝国の新しい首府に引き寄せるとともに、アムラスの外国での評判をよくした。しかしヨーロッパ各国の干渉に対する彼の最も有力な武器は、いつも完全武装した兵数一万の軍隊だった。彼はそれをドイツの将校団に訓練させて、その軍楽隊や、ドイツふうに歩調を取っての行進や、おおげさな制服は初めのうちはただ何かこっけいなものに思われていただけだった。しかしやがて一つの事件が起こって、それが国際問題に発展した。ある外国人の貿易事務官が沿岸地の魔窟で刺し殺され、アムラスはその町の広場に建っている聖公会の大寺院の前で犯人たちを絞首刑に処したが（そのほかに、証言が不充分と認められた何人かの証人もいっしょに処刑された）、それでも賠償金は支払うべきだという話が持ち上がった。そしてヨーロッパ人とアフリカ本土の土人の兵隊と半々で編成された討伐軍が上陸して来たところが、アムラスは彼の軍隊を率いてこれを迎撃し、海岸まで追い詰めて、敵の艦隊の目の前で全滅させた。この時、佐官級の白人将校が六人も降参して戦場で絞首刑に処され、アムラスは首府に凱旋した後、カトリック教会の大寺院にいる白人の神父たちにわが勝利の聖母のためにということで銀の祭壇を寄進した。

山地では、アムラスの評判はほとんど超人的なものになり、アムラスの名にかけて誓うこと以上に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com